

# 日本福祉心理士会 ニューズレター (No. 10)



**2021年9月発行**      **内容** : **日本福祉心理士会幹事から一言、事務局より、研修会のご案内**

## 理事長挨拶

片岡 玲子(立正大学)

日本福祉心理学会の活動につきましては、日ごろさまざまにご協力いただきまして、ありがとうございます。また、この度の熱海土石流の災害に会われた方々に心よりお見舞い申し上げます。

最近、TVの画面に流れる新型コロナ感染者数にため息をついたり、突然の災害のすさまじい被害に心痛めたりと穏やかならざる日々が続いております。私たちを取り巻く社会は不安定な要素に揺れている状況です。

福祉の文字を頂くのが福祉心理学会はこんなときなにかできることはないのかと考えています。

7月3日にFLECフォーラム(全国家庭養護推進ネットワーク)の、次の児童福祉法改正を展望し社会的養護をテーマとする緊急シンポジウムがWEBで開かれました。当学会常任理事の柏女霊峰先生の基調講演に始まり、福祉現場でのさまざまな取り組みが報告され、やはり当学会常任理事の相澤仁先生、上鹿渡和宏早大教授、林浩康日本女子大教授らによるシンポジウムがあり、厚生労働省家庭福祉課長の助言もありました。子どもの福祉の現場では、家庭で育つことのできない子どもたちの社会的養護について、里親での養育等、家庭的養護を推進する動きがあります。

高齢者福祉の場では以前より認知症の方やご家族への心理的支援が求められるようになってきました。高齢社会の深まりの中で、認知症については学術的にも臨床的にも、もっと心理学や心理支援が貢献できるのではないかと思います。

障害の分野では、精神や発達障害を含め障害を持って生きる人々にとっての権利擁護や合理的配慮の在り方が問われています。福祉の分野の制度は対象者別に作られているものが多いのですが、子どもの分野を除くと心理支援の仕事が制度上明確になっていくところはまだまだ多くはありません。国家資格としての公認心理師もようやく誕生しましたが、これからは様々な福祉の場で心理支援がもっと活用されてほしいと思います。そのためには、実践と研究の交流の場として、日本福祉心理学会がさらに機能していくことも求められます。当会認定の福祉心理士の質の向上も課題です。

そしてこの未曾有のコロナ感染症の時代、人々の交流が制限され、ひきこもりや自死者の増加も伝わってきます。多くの場でご活躍の学会員の皆様のお力をお借りし、困難な時代の福祉心理学会の意義をより高めていければと考えております。

どうぞご参加、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

## 会長挨拶

富樫 ひとみ(茨城キリスト教大学)

2019年度の幹事選挙において、会長の大役を仰せつかりました富樫ひとみでございます。

福祉心理士会は2008年に設立され、2021年の今年は、設立から13年目となりました。設立の当時、多くの先生方がご尽力され誕生に至ったのですが、中でも、初代会長の宮本文雄先生は、本会を育て、大きく発展させてくださいました。私は、宮本先生が築き上げてくださった福祉心理士会文化を大切に引き継ぎ、更に発展するよう努めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

新体制が編成されたのは2019年末でした。2020年度から新体制での活動を本格化しようとしていた矢先、今般の新型コロナウィルスが蔓延し出しました。社会では、コロナ禍対策が始まり、新しい社会習慣が定着していきました。マスクの着用や外出の制限、三密の回避など、皆さまにおかれましても対応に追われておられた2020年度ではなかったかと思ひます。

一方で、福祉心理士の皆さまが活躍されている現場は、直接的な対人支援を行うことも多いでしょう。今なお、ソーシャルディスタンスを確保することが難しい状況が続いていることと思ひます。コロナ禍と戦いながらの皆さまのお取り組みを、心から応援いたします。

本会では、昨年度から、活動の活発化についての議論を重ねてまいりました。いかに皆さまへの情報提供を促進できるか、また、皆さまのスキル向上などに寄与できるか、などについて話し合っただけでまいりました。活動の活発化の1つとして、2021年度から体系的な研修会の充実を図っていきたくて思ひます。

コロナ禍で社会が悲鳴を上げている昨今、社会には様々な困難や課題が山積しています。このような状況下、福祉心理士の力が必要とされる場面がますます増えていくでしょう。困難を抱えておられる方がたに、一層寄り添えるよう、自己実現をサポートしていけるよう、ご自身を高める機会を提供していきたいと思ひます。また、皆さまと共に、福祉心理士会が一層発展するよう、鋭意努力してまいります。

最後に、福祉心理士会では本会の業務を手伝っていただける方を募集しています。お手伝いをしていただける方がおられましたら、ぜひお声がけをお願いいたします。

今暫くは、コロナ禍が続く気配ですが、皆さま、お身体にどうぞお気をつけください。ご一緒に乗り切りましょう。

## 福祉心理学会の今後

野口幸弘(福岡障害者支援センター)

### 〇重度知的障害や行動障害を示す人たちへの行動論的アプローチの重視

1. 〈重度知的障害や行動障害を示す人たちへの支援〉  
1940年代以降心理学者は、言葉のない重度知的障害のある人が示す行動障害の改善や適応行動構築等社会問題の理解(と解決の可能性)に、学習理論に由来する原理を適用しようと努めてきた。この試みは、重度知的障害のある人の可能性(能力)を理解する上で著しい変化をもたらしたし、社会的に大きな貢献をした。

2. 〈応用行動分析学と教育・福祉との関係〉重度知的障害支援(教育心理)と行動障害支援(福祉心理)分野における行動論的アプローチ適用の最初の成功は、1968年の「Journal of Applied Behavior Analysis」の刊行でありその後を先導してきた。また重度の知的障害児者支援領域への応用行動分析学の導入は、2つの関連領域に焦点化されてきた。一つは、知的障害児者の能力(社会的機能=適応行動の学習)を促進すること(建設的介入)であり、もう一つは、行動障害を減らすこと(予防・軽減・改善介入:乳幼児期からの生活の中での一貫した行動障害の軽減・改善=病理的介入)である。

3. 〈オペラント行動の理解⇒適応行動も行動障害も同じ「オペラント行動」とみる視点〉応用行動分析学において最も基本的な行動理解は、行動障害を「オペラント行動」とみている点である。つまり、その行動障害が、環境的結果事象によって維持・形成されている行動の型としてみることである。この意味で、行動障害=機能的で適応的な行動としてみる。この行動の捉え方は、重度知的障害のある人達にしばしば見られる行動障害の原因や取り組みに関する考え方に革命を起こした(Carr, 1977)。

上記3つの事については、残念ながら、我が国の重度知的障害や行動障害を示す当事者やその家族、彼らを支援する医療・教育・福祉領域の専門家の一部を除いて正しく理解されてこなかったように思ふ。特に重度あるいは最重度知的障害のある(以前には「動く重症児」と呼ばれていた)子どもたちを直接支援してきた専門機関、医療・教育・福祉の支援の実践現場において、忌避されてきた歴史もある。

私自身1989年に発足した強度行動障害研究会が、「強度行動障害」という用語でセンセーショナルに定義したのを知った時、強く衝撃を受けた記憶がある。そして自分が学んできた実践としての応用行動分析学研究の視点の弱さ、実践内容の研究と情報公開の軽視に気づかされ、足元の実践の大

切さを痛感したことを思いだす。それ以降私はこの学会で意識して、重度知的障害児者に表れていた「強度行動障害」の人たちへの支援の実践例を報告してきた。行動障害を抱える当事者や家族支援の実践の中で、福祉心理分野の当事者支援の科学性の弱さ(自己の実践は無論)にも気づかされた。そして欧米を軸とした応用行動分析学の起こりやその後のデータに基づく行動支援の方法の開発普及や導入について、日本の障がい者(特に重度知的障害や自閉症スペクトラム(ASD)児・者対象にした)福祉心理分野に浸透させていく意義を強くしてきた。

最後になりますが、どうぞ今後の福心理学会の中軸に重度知的障害や行動障害を示す人たちへの重要な支援方法

である行動的アプローチの実践成果の公表の場として現場実践とともに研究を先導していく学会になることを切に願っています。

### ○引用・参考文献

- 1) Eric Emerson and Stewart. L. Einfeld. (2011). Challenging Behaviour, Third Edition. CAMBRIDGE.
- 2) Carr, E.G.(1977).The motivation of self-injurious behavior: A review of some hypotheses. Psychological Bulletin, 84(4), 800-816.

### 水口 進(常磐大学)

今年度、ニューズレター担当となりました。よろしくお願いします。

私は昭和58年から、そして今も心理臨床の世界にいます。その中でも福祉臨床に携わっている期間が一番長く、最近では「障害をもった子どもを早期から定期的に、しかも長期にわたってみることの必要性～発達臨床の実践の中から～」「療育の川の流れーその行き着く先はー」「心理査定学彷徨記」というような、原著にも研究ノートにもならないものを、心理臨床研究に係わる論考として書き散らしています。平成9年からはスクールカウンセラーも務めてきましたので教育系の学生向けに、昨年度は「発達障害生徒との関わりを楽しむために」という一文を書きました。

今年度末で定年を迎えるので、一般向けに冊子のようなものを作り、研修会等で配布したいと考えて3冊作り、自費で1,000部ずつ印刷しました。一つ目は子育て中の母親たちのために書きました。タイトルは「世界一短い育児書」。二つ目は高機能自閉症児をもつ保護者用に書きました。タイトルは「世界一短い療育本」。三つ目は孤立と孤独をテーマに、これは一般向けに書きました。タイトルは「世界一短い人生哲学書～豊かな虚の世界を求めて～」。私は今年の日本精神衛生学会第37大会の会長をつとめることになっています。大会テーマを『豊かな虚の世界を求めて』にしました。コロナ禍における孤立と孤独について、こんなことも考えながら、今は昨年以上に忙しい日々を送っています。そういう意味では定年前の一年、充実しています。

### 塩澤綾子(社会福祉法人 浴風園)

ニューズレターを担当させて頂く、塩澤綾子と申します。多種多様な会員の皆様がいらっしゃる福祉心理学会は、専門的なお話から今の福祉現場での生のお話を聴けるとても貴重な会であると認識しております。さらに、大会の手伝いや、実際に参加させて頂く中で、皆様の現場で実践されているお話や研究・論文などのお話を伺えることで、自身の見聞を広げることが出来ていると感じています。ニューズレターが皆様の架け橋の1つとなり、この福祉心理学会がより活性化していくきっかけとなれば幸いです。

### 宮本文雄(元 東日本国際大学)

日本福祉心理士会の活動も8年になりました。福祉心理士会発展の手助けができればと思っております。先ず、福祉心理士資格の専門性を高めていくことが重要であるとと考えております。福祉心理士資格の専門性の問題は、日本福祉心理学会創設以来、検討されてきた課題でもあります。一般的なことですが、会員相互の情報交換の活性化と研究支援、各地区の研究会・研修会の開催、そして、全国大会における研究・研修会の企画等、幹事会において討議・検討を行っていただければと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

### 寺田 翼(社会福祉法人 原町青年寮)

私は福祉心理学会が開催する学会の大会発表・研修会等の手伝いとして参加させて頂くことがあります。その大会発表等を通じて多種多様な職種の会員の皆様のお話を伺えることで、それぞれの分野の専門性や知識をすべて毎回自身の見分が広がったように感じます。特に専門的な現場での実践に関して幅広く知ることができる、お話を聴くことができるのは貴重なので、これからも多くの方が繋がり大会や研究発表が活発化していくと嬉しいです。ニューズレターがそのきっかけとなれば幸いです。

### 村本浄司(九州看護福祉大学)

はじめまして。九州看護福祉大学の村本と申します。私はこれまで、知的障害者や発達障害者に対する支援を中心に研究してきました。特に、日常生活の中で様々な行動問題を示すことで著しくQOLが低下している方やその家族に対して、支援を行うことでそのQOL向上の手助けになるような支援方法を見つけ出せるように日々研究しています。ソーシャルワークも心理学もどちらにおいても、ニーズを発見してから、アセスメントし、ケースフォーミュレーションし、仮説を立て、支援計画を立案し、実践し、評価して、再修正するという流れは同じです。すなわち、ソーシャルワークにおいて心理学的アセスメントが重要であり、心理学においても福祉マインドが求められると思います。これからも福祉と心理、どちらのマインドも重要視しながら実践や研究に邁進していきたいと思えます。

### 大原天晴(国立武蔵野学院)

国立武蔵野学院の大原です。前年度まで福祉心理学会のニューズレターの作成に関わっておりましたが、日々の仕事が多忙を極め福祉心理学会の仕事十分に担うことができなくなり、申し訳なく思っています。昨年度までのニューズレターでは、各会員の実践や研究をご紹介いただき、そこから「福祉心理学のカタチ」を浮き彫りにすることができればと考えてきました。多くの先生方にご協力いただき、様々な福祉心理学のあり方が発信されたのではないかと考えています。これまでご協力いただきました先生方に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

私自身は、臨床心理学と社会福祉学の融合した実践的な学問領域として福祉心理学が位置づけられ、福祉心理士が児童や障害、高齢だけではなく、社会的に排除され抑圧されている人々に対して、その人たちが本来持つ力を最大限に発揮できるように心理面と社会構造のありかたに働きかけていく専門職として、さらに多様な領域で活動していくことを期待しています。また微力ながら私自身も貢献していきたいと思っています。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

### 大迫秀樹(福岡女学院大学)

近年、福祉分野における心理支援の重要性が高まってきています。現在、大学にて「福祉心理学」の授業を担当していますが、学生たちが授業を通して、より充実した学びができるためにも、学会、福祉心理士会の活動を通じて、いろんな知見を吸収していきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

### 大部令絵(日本女子大学)

この度初めて幹事を務めさせていただくこととなりました。どうぞよろしくお願いいたします。地域共生社会の実現が求められる今、多様化・複雑化した“生きづらさ”に対して向き合う全ての人に対し、本学会から発信されてきた数々の研究成果は一層意義深いものとなってきていると感じます。また、手続的給付という言葉で表されるように相談援助の価値が高まる中、福祉心理士という専門性を備えた人材も益々求められていくことと思います。私自身は大学院生時代から、本学会の論文投稿や学会発表において貴重なご指導をいただきましたので、少しでもお役に立てれば幸いです。

### 中山哲志(東日本国際大学)

コロナ禍にあつて、人々の暮らしが大きく変わってきました。これからの社会を考える上で本学会は研究や実践でどのような役割を果たしていくのか、会員の皆さんと共に考えていきたいと思えます。

### 田中周子(立正大学)

学会の財務委員長を拝命しております。皆様からお預かりする会費等が学会活動で有効に活用されるよう善処いたします。どうぞよろしくお願いいたします。専門は、子ども家庭支援(心理相談、支援者のコンサルテーション、調整)、司法面接研修(虐待等の出来事について子どもや障害者等から聴取する面接法の研修実施)です。

### 網野武廣(現代福祉マインド研究所)

21世紀の初頭に設立された日本福祉心理学会に設立当初から深くかかわらせていただいて、間もなく20年になろうとしています。その間、福祉をめぐる状況の変化、

多様化の中で、学会員のひとりとして福祉心理学のアイデンティティへの模索を続けてきました。後期高齢者の一員となって数年が経ち、とくに福祉そして福祉心理学の真の意義や福祉実践の基本理念、方向性について一度本格的に論考をまとめてみたいと考えています。学会がいよいよ成人期に入ります。新たな視点も含め、有意義で活発な展開がなされることを強く期待しております。

### 有村玲香(鹿児島国際大学)

こんにちは。福祉心理士の幹事を務めています、有村玲香(鹿児島国際大学)と申します。これから、福祉心理士の発展を目指して皆様とご協力できればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

## 事務局より

### 「福祉心理士」の拡大と質の担保を目指して

福祉心理士会事務局 渡部 純夫

2009年から「福祉心理士」の資格制度をスタートさせて、12年の年月が経過しました。干支でいえばちょうど一周したということになります。干支は、十干と十二支を組み合わせた60を周期とする数詞であります。暦をはじめとして、時間、方位、事柄の順序などに用いられ、60日、60か月、60年などを表しています。このことから60は10と12の最小公倍数であるため、干支そのものは、60回で一周することになります。しかし、干支の組み合わせはすべての組み合わせの半数でしかありません。残りの半分を、これからの12年でどのように充足させて完成させていくのかが、当会の課題ということになるのではないのでしょうか。

#### 1. いかに「福祉心理士」の知名度を上げていくか

公認心理師の国家資格が制定され、世の中の流れはどちらかというこの公認心理師に傾いているような感じがしております。それぞれの資格には、果たすべき役割に違いがあります。「福祉心理士」には、世の中の人々の幸せを願い、一人ひとりの生活の質を向上させていくという目標があると考えられます。その為貢献できる資格の知名度を上げ、多くの人たちに知っていただく必要があります。専門家として各自が実力をあげていくことが求められます。福祉心理士会と致しましては、その為の研修会や講習会を行い、会員の皆様の実力アップに貢献してまいりたいと考えております。来年度初めに会員の皆様を始め、福祉心理士に興味を持たれている大学の学生さんをはじめとして、現場でお仕事に励んでおられる方々を対象にした学習の機会を作っていきたいと考えております。「福祉心理士」の資格を知っていただくためには、まず、福祉系・心理系などの大学で学んでおられる学生のみなさんに広く知っていただくことが、すそ野を広げるための近道ではないかと考えております。多くの大学生の皆さんに「福祉心理士」の資格を取っていただき、会員の数を大



幅を増やしていくことが欠かせないと思われま。数は力ですので、まずは会員を増やすことを第一の目標に掲げていくことがよ。しいのではないかと考えております。

## 2. 質の担保をどう図っていくか

会員の数が増えていく中で、次に求められるのが質の担保ということになります。ただただ、資格を持っているからと言って、それだけで十分な貢献が出来るものではありません。日常的な研鑽と努力の中で優れた福祉心理士の姿が出来上がってまいります。その為、会員の皆様に資格継続のための研修会に参加していただくような形を作ってまいりたいと思います。心理学や社会福祉学に関連する学問としての内容は奥が深く、内容にも沢山のものがあります。その為、簡単に身につけることが難しいところがあります。会員の皆様の英知を結集して、会員の間で共有し合い切磋琢磨していく事が求められていると思われま。

## 3. 資格の対象を広げていく

現在の福祉心理士を習得できる対象は、社会福祉や心理学を専門に学んだ人たちに限られるため、領域としては狭いものであります。福祉心理士の業務が人々の幸せに貢献できるものであるとすれば、もう少し領域を広げていくことも検討してもよいのではないかと考えております。ただこれは難しい問題で、どこまで専門性を求めていくかという「福祉心理士」としてのアイデンティティとも大きく関係してまいります。議論を重ねながら、進めてまいりたいと思っておりますので、会員の皆様からの忌憚のないご意見をたまわりたいと考えております。

## 4. 「福祉心理士」を支えている学問の構築

精神科医の根幹の学問は「精神医学」であり、臨床心理士は「臨床心理学」を、カウンセラーは「カウンセリング心理学」であるように、「福祉心理士」の根幹を支える学問として、「福祉心理学」の構築が急がれるかと考えております。

以上、事務局として4つの課題を上げさせていただきました。すぐに解決できる問題は一つもありません。地道に一つ一つ積み上げていく先に見えてくるものがあるのだと信じております。その為、努力を続けてまいりたいと考えておりますので、どうぞご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。

---

## 研修会のご案内

### 令和3年度 日本福祉心理士会研修会(12月研修)

福祉心理士会研修担当 大西 良

日本福祉心理士会では、12月に開催される日本福祉心理学会の開催日に、下記のような研修会を計画しております。今回の研修テーマは「福祉心理士が貢献できること」で、講座と実践報告を予定しています。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

テーマ:「福祉心理士が貢献できること」

日時:2021年12月25日(土) ※日本福祉心理学会と同日開催

方法:Zoom

講座:「人々の幸福(QOL)に貢献する福祉心理学」(30分)

講師:渡部 純夫さま

実践報告:「現代的な課題(コロナ禍)における福祉心理士のアプローチ」(各 15 分)

報告者:小林 真起子さま

報告者:後藤 幸洋さま

---

【編集後記】

新型コロナウイルスの感染者が増え続けている。多くの地域で過去最多を更新している。緊急事態宣言の対象地域は拡大し、8月20日現在13都道府県が指定されている。

昨年からの多くの学会大会がWeb開催となった。今後もWeb開催は続くことが予想される。Web開催に伴い、会員相互の交流は減っている。対面での学会、研修会が懐かしい。

今年度ニュースレターを担当することになった。昨年度は休刊だったようである。昨年からの新型コロナウイルス感染症への対応により、ニュースレターどころではなかっただろう。まだまだニュースレターどころではない状況が続くと思われるが、皆様からの福祉の声を届けていければと思う。

ニュースレター編集担当  
水口 進、寺田 翼、塩澤綾子